



生ごみ、固形燃料ごみ、乾電池類など、7種13分類と細かく分別し、可能な限りリサイクルを行い、再資源化率60%（平成12年3月現在）と、全国一のリサイクル率を誇る富良野市。住民とともに作り上げたごみ分別収集システムは「富良野方式」と呼ばれており、TVドラマ「北の国から」で主人公・純がごみ収集員を演じていたことも記憶に新しいのではないのでしょうか。

富良野市でのごみ収集とリサイクルについて取材しました。



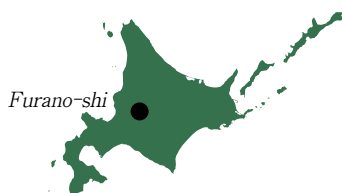
市役所駐車場には分別指導車が。

■ 住民の声がりサイクル検討のかぎに

ごみリサイクルの取り組みは、当時の埋立処分場の閉鎖問題がきっかけでした。そこでは収集されたごみがすべて一緒に埋め立てられていたことから、悪臭、ハエなどの環境衛生上の問題、カラスによる農作物や家畜への被害などが起こっていました。また市内のごみステーションでも犬やカラスがごみを荒らすといったことが繰り返されており、この原因が生ごみであることは明らかで、処分場は閉鎖を余儀なく迫られていました。今までの経緯から新たな用地確保も住民の反対に合うことは明白でした。そこで、処分場やごみステーション問題の原因である生ごみを分別し処理することを考えたのです。

一方、富良野の基幹産業である農業分野では、化学肥料や大型重機の導入により、土壌の有機質不足が顕著になっていました。このため有機肥料の使用や連作障害の回避などにより、質のよい作物生産のための土づくり運動を進めていました。そこで、ごみ問題と農業の問題を結び付け、生ごみを分別収集・堆肥化し、それを農地づくりに生かすことができなかと、長野県のコンポスト施設調査や、促成堆肥の作物に対する試験、家庭におけるごみの分別方法、ごみステーションの配置計画などの研究を進めました。促成堆肥の効果は実験3年目からその効果が現れ、またごみ分別収集は、主に家事を行う女性への理解と協力を努めるとともに、ごみステーションの管理保管を町内会が各自検討することとな

住民との連携による リサイクル



Furano-shi

Case Study @ furano-shi.

り、'83年には生ごみの分別収集が、そして'85年には有機物供給センターが完成し、有機肥料の生産が始まりました。センターは腐蝕防止のために生ごみ受入棟以外は全て鉄筋コンクリート造りにし、悪臭防止対策には木くずと土壌菌を活用しています。現在、センターで生産された肥料はトン当たり2,700円で地元農家に販売され、農業生産物の質の向上にも役立っています。

❑ 「富良野方式」の完成

生ごみ分別に続いて富良野市では'87年に可燃ごみについての調査・研究をスタートさせました。生ごみ分別に着手してわずか数年で新たな取り組みが可能となったのは、市民の理解と協力があったからです。農家では生ごみの堆肥化は生活習慣の一部でもあったため、生ごみ分別と堆肥化への理解が早かったのです。

生ごみ処理の転換で埋立処分場の環境はよくなり、ごみの総量は減ったものの、依然としてごみ容量が激減したとはいえません。そこで、生ごみ以外に資源化できるものがないかと検討が始まったのです。そこで考えられたのが紙・木・プラスチック類を固形燃料化しようというものでした。当時はあちこちで燃料化が試みられており、道内でも研究が進んでいたことから、当時の技術に改良を加えながら、'88年から可燃ごみの固形燃料生産が始まりました。製造された固形燃料は、市営温泉で給湯用燃料とし

て利用されています。固形燃料化は需要先があまりないことから、事業化が進まないという問題があるのですが、富良野市の場合は市内の施設に還元し、さらにそれが市民に見える形でリサイクルされているため、理解が深まり一石二鳥になっています。これに合わせてごみ分別は、あき缶、びん類、乾電池が加わり6種分別となります。あき缶、びん類は再処理業者に、乾電池も市内の電器店を通じて再処理業者に処理が委託される仕組みです。こうしてできあがったごみの6種分別と、可能な限りリサイクルを行うごみ処理は「富良野方式」と呼ばれ、①農業振興と生ごみのリサイクル、②暖房用燃料と可燃ごみのリサイクル、③環境にやさしい適正処理のリサイクル、④市民と行政の二人三脚のリサイクルと、4つの特徴を持った取り組みとして注目を浴びました。'94年には厚生大臣選定の「クリーン・リサイクルタウン」として選ばれ、このほかにも数々の表彰を受けています。

❑ クリーンタウンを目指して

こうした取り組みを背景に、富良野市では次代に向けたごみ処理を検討するため'98年から庁内にプロジェクトチームを設置し、さらなる資源化に向けての取り組みが進められています。現在、市内のごみは約6割が堆肥化、固形燃料化、再生利用されており、残り約4割は焼却処分と埋立処分となっています。プロジェクトチームでは国の政策等も



市役所内にはクリーン・リサイクルタウンの選定書が飾られている。

見合わせて、議論の結果、焼却処分されていたごみについては'02年12月以降、焼却を廃止することに決定しました。このため、さらに分別数を増やして再資源化に取り組むことを前提にモデル地区を設定、最も効果的な分別内容を実験中です。分別が増えると住民の手間が増えるわけですが、モデル地区住民とも対話しながら、効果的な方向を探るものです。

■ 行政と民間、住民が手を合わせて

こうした取り組みには、住民の理解が欠かせません。「行政が意識改革をと叫ぶだけではなかなか進まないところもあります。やはり一番大切なのは住民の意識。その点、富良野市では住民の理解を得られたことが現在につながっていると思います。さらにこれをよい方向に向けていければ」と市民部環境生活課環境管理係の関根主査。住民の理解はもちろんですが、市民が協力しやすいような工夫も見られます。ためるとかさばる空きびんは市内にポストを設置し、常時捨てることができるようにしているほか、生ごみなどあまりためておけないごみは週2回収集しています。また生ごみ、固形燃料ごみ、プラスチックごみ、ペットボトル、一般ごみについては市指定の専用ごみ袋を使用することになっていますが、分量・回収回数などに合わせた適当な大きさのごみ袋とするなど、それぞれのごみ質に合わせてさまざまな工夫がされてきました。

現在、富良野市には生ごみの有機肥料化を行う有機物供給センター、固形燃料化を行う農業廃棄物処理施設、焼却処分を行う一般廃棄物処理施設（'02年11月まで）、そして富丘埋立処分場の4つの施設がごみ処理を担っていますが、従来の焼却施設を1つ建設するよりも、これらの施設合計建設費の方が安価だといいます。分別することで、処理が単純化され、複雑な設備がなくなるためです。

リサイクルについては全国でも有数の富良野市ですが、ごみそのものの容量は年々増加傾向にあります。ごみは人数ではなく戸数に比例する傾向が見られ、核家族化、単身世帯の増加などにより、ごみ減量政策や啓蒙活動もなかなか効果が表われていないのです。しかしごみ減量には行政だけでは解決できない面が多いことも指摘されています。商品の過剰包装と、きれいに包装されたものを選んでしまう消費者。生活習慣と供給者側の倫理観がごみ減量に対応していかなければ、解決への大きな前進にはならないのです。「富良野市が目指すのは煙の出ないまち。ごみの焼却をなくすことでクリーンなまちを取り戻し、そのままの自然を残したい。ごみ処理だけでは解決できない面もありますが、まずはごみを解決しないと次のステップにも進めません」（前出・関根氏）。

このように、リサイクルにおける富良野市の取り組みは、非常に先進的です。そして、それを支えるのは、行政と住民が一体となった意識の高さです。今後、容器リサイクル法の充実など、全国的な動き



市内に231カ所（'00年4月1日現在）ある空きびんポスト。びんの色でさらに分別する必要があるが、いつでも捨てることができる。



ごみステーションは市内に616カ所（'00年4月1日現在）。